

都道府県を調べよう 鹿児島県(九州地方)

—新学習指導要領の方向性や移行措置を
意識した授業の構想—

鹿児島市立郡山中学校 河野克純

1 はじめに

今年3月に新学習指導要領が公示され、7月には「解説」も発表された。その中身は、世界や日本の地誌学習の充実が図られるなど、またも大幅な改訂である。その中で、久々に「日本の諸地域」が復活し、現行学習指導要領の「都道府県規模の調査」は削除されることになった。

ところで、来年度から移行措置期間が始まるが、社会科でも平成24(2012)年度からの完全実施に向けて、平成22(2010)年度入学の1年生から地理は120時間(現行105時間)に増やし授業することになる。そのためには内容の改善も必要となる。もちろん、来年度に関しては、現行学習指導要領に基づいて実施すれば移行措置を考えずに授業をすることも可能だ。しかし、変化の激しい時代において、社会的要請から新学習指導要領が出されたことを考えれば、できるだけその趣旨や内容を取り入れて指導していくことが必要だと思われる。

そこで本稿では、これまでの実践を踏まえ、消えゆく「都道府県を調べよう」を、その都道府県の属する地方の内容も含みながら、新学習指導要領(2)ウ「日本の諸地域」の七つの「考察の仕方」に基づいた動態地誌を意識して学習を展開する授業を構想したい。

2 単元構成について

新学習指導要領との関係

前述の「考察の仕方」(ア)の「自然環境を中核とした考察」で九州地方を事例に取り扱うことを意識し、鹿児島県を中心にして九州地方全体の地域的特色をとらえさせる。

おもな鹿児島県や九州地方の地域的特色

新学習指導要領では、「地域の地形や気候などの自然環境に関する特色ある事象を中核として」となっている。そこで鹿児島県や九州地方で考えた場合、「火山が多く分布し、シラス台地などの火山灰が厚く堆積した地域が広がっている」「比較的温暖な地域であるが、台風の影響や梅雨期の集中豪雨などの自然災害が多い」といった地域の自然環境に関する特色ある地理的事象に着目し、それを中核とする。そのうえで、人々の生活や産業に関する地理的事象と関連づけて追究・考察し、茶や畜産、促成栽培、防災の工夫などをとらえたい。

単元の配列の工夫

現行学習指導要領では、2部2章の都道府県の調査は基本的に1年生で学習することになっているが、新学習指導要領の学習順を意識し、3部「世界と比べてみた日本」を先に学習し、その後2部に戻る順序で学習したほうが、その学習の成果を生かす学習展開ができると考える。

3 展開例

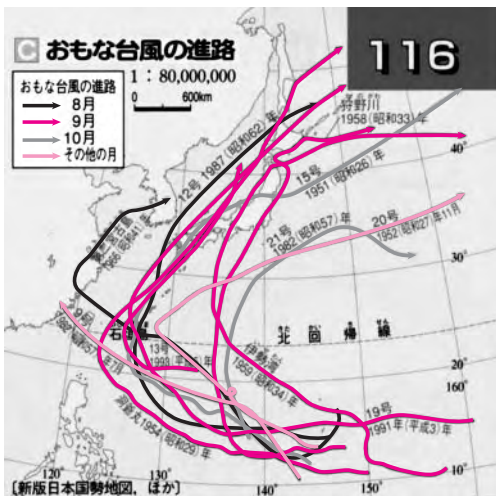
今までの授業実践を踏まえ、新学習指導要領の「解説」を参考に、授業展開例を考えてみたい。

地域の特徴を示す地理的事象を見出す段階

鹿児島県（九州地方）の概要について、これまでの学習の成果や教科書や地図帳、資料集を使って学習する。

まず、地図帳の「日本の気候」の各種資料図を見せ、日本全体の視野から鹿児島県や九州地方の特徴を読み取らせる。

- ◆冬でも比較的温暖な気候
- ◆九州は全体的に降水量も多い
- ◆夏に雨が多く冬は降水量が少ないという太平洋側の気候の特徴
 - プロスポーツチームのキャンプ地など
- ◆台風の通り道（勢力も強いまま接近）
 - 自然災害へのつながり



「中学校社会科地図 初訂版」 p.116

次に、地図帳の「日本の地形」の主題図や「九州地方」の地図を見せて、白地図等を使いながら地名などをおさえたいうえで、自然環境に関

し鹿児島県や九州地方の特徴を読み取らせる。

- ◆火山が多く分布している。桜島など今もなお活発に活動している火山も多い
 - 噴火・土石流などの自然災害
- ◆温泉も広く分布している
- ◆九州南部には、シラス台地と呼ばれる火山灰が堆積した台地が広がっている
 - 稲作に不向き／畑作も限られる
- ◆平地は比較的少ない
 - 水田が少ない



「中学生の地理 初訂版」 p.146

このように見ると、よい特色もあるが、稲作などの農業の視点から見れば、厳しい面も見られることがわかる。

中核とした事象を他の事象と関連づけて追究する段階

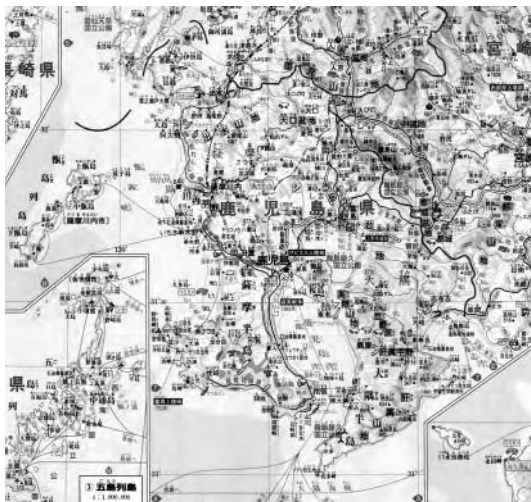
そこで、単元を貫く学習課題として、「稲作にぎびしい自然環境に対応するために、人々はどのような工夫をしているのだろうか？」を設定し、人々の生活や産業などに関する地理的事象と関連づけて追究し、考察させる。

まず地図帳のp.74「九州地方」の地図やp.119の「③日本の農業」のA～Dの主題図から九州の農業の特徴を読み取らせる。

- ◆九州は水田率が低い。有名な米の産地も

ない。

- ◆熊本、宮崎、福岡など野菜の生産額が多い。宮崎や鹿児島では冬や春にピーマンを栽培している。
- ◆熊本や福岡、長崎など西海岸では果樹栽培がさかん。
- ◆九州南部のシラス台地でも野菜づくりや畜産がさかん。



「中学校社会科地図 初訂版」p.74

そこから、次の二つのサブテーマをつくり、地図などの資料を基に調べさせていく。

①「宮崎ではなぜビニルハウスを利用した促成栽培がさかんに行われるのだろうか？」

地図帳p.77の「宮崎平野のビニルハウス」やp.82の「高知平野の野菜栽培」の資料も参考に、関東などの大消費地へ他の産地で生産できない冬の時期に売ることによって高く売れるというメリットがある促成栽培を読み取り、理解させ、そのうえで、なぜ宮崎や鹿児島（大隅半島）、高知でさかんに行われているのかを考えさせる。

- ◆太平洋側の気候の特徴である「冬に温暖で晴天が多い」ことが一番の理由

プロスポーツチームが同じ時期にキャンプに来るとダブらせると生徒も理解しやすい

のではないだろうか？

- ◆温暖で晴天が多ければ、ハウス暖房の燃料代も抑えることができる。

地形や温暖な気候を利用する人々の工夫の一つである。大消費地までの距離が遠く、輸送コストがかかっても、このような気候の条件がそろった地域は少ないため、価格が高くなり、メリットがあるのである。最近の動向として、マンゴーなど温暖な気候を生かした新しい作物づくりも盛んであることもふれたい。

②「水もちの悪いシラス台地で、なぜ畑作や畜産がさかんに行われているのだろうか？」

地図帳p.77の「シラス台地の開発—笠野原の変化—」の資料等を見て、新旧二つの地図を比較して、シラス台地の開発による変容をとらえさせる。

まず、開発前はどのような土地利用であったのかを地図から読み取らせる。

- ◆さつまいもやなたねの畑が中心
- ◆川の側だけに水田が少し広がる

このように、シラス台地では、その土壤から、栽培できる作物にも制限があることがわかる。それが、最近の地図の方から土地利用を読み取ると、かなりの変化を読み取れる。

- ◆飼料作物や野菜づくり（露地・ハウス）がほとんどになっている。
- ◆ふた・牛・にわとりなどの畜産もたくさん行われるようになっている。

そこから、なぜそのように大きく変化したのか、どのような開発が行われたのかを二つの地図を比較して読み取らせる。

- ◆高隈ダムがつくられ、そこからかんがい用水がシラス台地上にはりめぐらされている。土地改良が進んだ。

最後に、なぜ畜産なのかを考えさせる。すべて野菜づくりの畑作中心でもよいはずなの

に、なぜ畜産が盛んになったのか。そこにも、自然環境が大きく影響している。

◆シラス台地はこのようにかんがいなどの開発がなければ畑作さえも厳しい土地であること

◆台風のための農作物被害が多いこと
他にも、飼料作物や志布志港などへ輸入される海外の安い飼料により、清浄で広大な土地を畜産の施設に利用でき、大規模な畜産会社やファストフードチェーンとの契約などもあって、日本を代表する食料供給基地になっていることもふれたい。また、輸入自由化による安い肉への対抗、ブランド化なども資料を基に取り上げ、人々の努力を考えさせたい。

最後に、三つめのサブテーマをあげる。

③「火山や台風などの自然災害に備えた生活の工夫を調べよう」

追究の過程や結果を表現する段階

学習のまとめとして、九州地方の自然環境に関する地理的事象を中核として、それを人々の生活や産業などに関連づけ追究した過程や考察の結果を、地図を活用して表現し、事象間の関連を互いに説明したりするなどの言語活動を位置づける。

具体的には、九州地方の白地図を用意し、その中にこれまでの調査や学習でわかったことをまとめて書き込ませ、分布図やイラストマップを作成させる。そのうえで、書き込んだ地理的事象の関係を説明する説明文を書かせたり、レポートをまとめさせたり、小さなグループ内で説明させあったりして、言語による表現力の育成も図りたい。

4 結びにかえて

新学習指導要領の完全実施までには期間があるが、来年度からの移行措置、あるいは今すぐにでもその趣旨や方向性を意識した授業改善をすべきである。今回の授業構想も含め、私は以下の点に留意して地理の授業実践をしていきたいと考える。

- ①世界や日本の地理的認識を深めるため、地誌的な学習を充実させること。しかし地域の特色を、網羅的、並列的にあつかうのではないこと。また、生徒が追究する活動を通して地域的特色をとらえさせること。
- ②思考力、判断力、表現力等をはぐくむため、地図の読図や作図などの地理的技能を高めること。そのために地図帳の有効活用を。
- ③さらに説明や論述、意見交換やレポート作成など言語活動の充実を図るような学習活動の工夫をすること。

HP「桜島国際火山砂防センター」より

この景観写真は、桜島の砂防ダムである。土石流から下流の集落を守るために造られている。このように、厳しい自然環境と共存・共栄するための人々の営みをとらえさせたい。ほかにも、火山では「ハザードマップ」や降灰予報、風水害対策では、台風対策がなされた沖縄の民家や、防災無線の整備などきめ細かな防災情報の提供など、地図帳のイラストや写真、資料などを駆使し、生徒に自然災害に備えた生活の工夫をとらえさせていく。